

[共同研究報告]

2021年度共同研究

# 「千葉学の実践：八街の近代、 開拓と人の移住を中心に」

研究代表者：高 田 洋 子 (本学特任教授)

研究組織者：高 橋 誠 一 (旧八街郷土史研究会)

研究組織者：田 口 功 (元本学特任教授)

## はじめに—共同研究の端緒と目的 高田 洋子

太平洋に臨む房総半島には、近代以前から黒潮に乗って移動してきた人びとの暮らしと文化が根づいている。江戸に繋がる利根川を利用した物と人の移動も、各地に豊かな産業と文化をはぐくんできた。戦後の千葉は、東京大都市圏で働く人びとのニュータウンとなり、またオフィス街とマンション群の林立する幕張新都心や浦安の東京ディズニーリゾートも人びとを千葉に引き寄せる。さらに日本の空の玄関口である成田国際空港は、世界の人びとの移動拠点である。このように千葉は移動する人びとによって創られ、発展した社会といえるのではなかろうか。本共同研究の目的のひとつは、人の移動の観点から八街地域の近代における社会形成の特質を明らかにすることにある。

佐倉市物井に本学の国際学部が開設された頃（1997年）、数名の教員の間で、成田市三里塚周辺地域の社会的・文化的特性を考える研究会が発足した。勤務校が立地し、学生の出身地である千葉県を知るための機会と考え、すぐに参加した。近代日本の軍事史が専門の故神田文人先生、日系アメリカ移民史研究の村川庸子先生に導かれ、明治の文明開化の香りを残すマロニエ並木の先に佇む三里塚の御料牧場記念館を訪問したこと、また鎌ヶ谷市郷土史研究会の案内で七栄の旧牧場跡の「野馬土手」を見学したことが昨日のこのように思い出される。沖縄出身のアメリカ移民（主に久米島出身者）で戦後に引揚者として三里塚に移住した家族に、インタビュー調査を行ったこともあった（1）。戦前のそのような史実に触れるにつれて、千葉県の近代というテーマに対する私の興味は高まった。特に明治期以降の下総台地の開拓は、それまで私が取り組んでいたベトナム領メコンデルタにおけるフランス植民地期の開発と大土地所有制成立との類似点も多く、比較の観点から探求意欲が湧いた（2）。

下総台地の大部分は、周知のとおり、近世の時代に江戸幕府の軍馬を育てる放牧地であったために人びとの自由な開墾は制限されていた。その後に明治政府がこの地を士族授産および東京窮民のための入植地と決めたことから、台地の開拓が徐々に進んでいく。しかし、その社会形成の歩みは地域ごとに困難も伴った。

下総台地に点在した明治期以降の開拓13村（いわゆる「東京新田」）には、入植順に次

の美称が付けられた。初富、二和、三咲、豊四季、五香六実、七栄、八街、九美上、十倉、十余一、十余二、十余三。なかでも「八街」は入植当初の明治4年1月時点で、最大規模の面積と入植者数を擁した。その後周辺古村を統合し、13村のうち唯一開拓期の地名をそのまま冠する「八街町」に、そして戦後は「八街市」となった。また旧開拓村のなかで際立つ在村巨大地主、「開墾の祖」とされる西村郡司の足跡も残る(3)。

共同研究報告の前半では、高橋誠一氏がその西村郡司の功績および人物像を論じる。高橋誠一氏とは、西村家第5代目当主の西村清氏(黎明高校理事長)と同高校元教頭の根本明彦先生(現校長補佐)との交流を通して出会うことができた。今から7年ほど前のことである。高橋誠一氏は、秋田県の農業新聞社を定年退職後に、八街市に新規移住された。そして「八街郷土史研究会」の事務局長として、20年以上にわたって八街開墾の一次資料の収集に専念されてきた。高橋氏が集成・編纂された『会誌 郷土八街』は全39号、臨時号48冊(4)に及ぶ。これらの一次資料を読み込んだ西村郡司論を、本共同研究の第一報告として掲げる。

続いて後半は、高田が近代の八街の社会形成史を素描する。私は日本史の門外漢であるが、メコンデルタ研究の経験から得た開拓社会に関する仮説を踏まえて、八街の近代史を比較探求している。

本共同研究は、近代の下総地方の開拓と人の移動に着目し、八街の事例を基に千葉県における一つの地域社会の創生過程とその特質を明らかにする試みである。

追記：もう一人の研究組織者である田口功氏(本学教育学部元教授・名誉教授)は千葉生まれの地元人として共同研究に参加された。田口家は船橋市夏見に一族のルーツがあり、過去帳には個人の俗名・戒名、没年月日、享年が先祖代々にわたり書き加えられている。最も古い先祖の没年記録は承應2年(1652年)に遡るといふ。貴重な家系図を参考史料にご提示くださったことを記し、謝意を表します。

## <注>

- (1) 戦後に宮内庁による旧御料牧場の土地放出を受けて沖縄地方出身の引揚者が定住したが、成田国際空港建設計画が立ちあがると、農業に不慣れであった人びとは比較的早く代替地などへ移った。
- (2) 本稿はこれまで私が執筆した下総開墾史に関する4つ目の論攷となる。本学での教育と研究の合間に細々と続けてきた私自身の「千葉学」の一つの終着点である。私はフランス植民地期のベトナム研究者であり、近代のメコンデルタ開拓を専門とする。メコンデルタは、一年の半分を占める雨季に土地が浸水する一方で、乾季には水不足で大地は干からびる。人間にとって厳しいその自然環境が開拓を妨げていたが、フランス植民地権力による幹線運河の掘削を機に入植地となり、新しい社会が創成された。このような研究から得た知見を日本の事例と比較検討して、両者をより深く理解したいと考えている。
- (3) 平成25年2月に八街市郷土資料館は「西村郡司生誕200年記念展示：近代八街の祖 西村郡司」と題し開墾事業を牽引した西村の活動と功績を紹介している。
- (4) 2021年度敬愛大学総合地域研究所共同研究費で製本し、メディアセンターに全巻寄贈した。ご協力いただいた本学メディアセンター並びに本研究所運営委員会に心から感謝する。